



ユネスコ群馬

No.70

群馬県ユネスコ連絡協議会

会長 関口 実 副会長 矢野 薫・北川 紘一郎 事務局 若田部 茂子 事務局 群馬県教育委員会生涯学習課

引き継ごう 人類の宝物(いつまでも震災を忘れない)



年頭の所感あれこれ
群馬県ユネスコ連絡協議会
会長 関口 実

平成二十七年の新春が訪れました。ユネスコ活動にかかわる皆様お一人おひとりととって意義深い一年になりますようお祈りし、お祝い申し上げます。

おめでたい新春を迎えながらも、周囲の国々から日本の一挙手一投足をあげつめられたりすると、正直なところムツとしたり、カッときたりします。でも、すぐに、ユネスコにかかわる者として反省します。かつて

人の足を踏んだのは日本人であるのに忘れかけています。踏まれて痛い思いをした人は、簡単に忘れられないものでしょう。

さて、昨年は群馬で、関東ブロックユネスコ活動研究会イン群馬が開催されました。そのために県下ユネスコ会員の皆様には、準備期間を含めて格別のご苦勞をおかけしました。しかし、そのご苦勞が実って、関東ブロックユネスコ活動研究会の新しい開催スタイルが確立されたことと各都県参加者から評価されました。

実は、この大会開催の前年、日本ユネスコ協会連盟から、ブロック大会開催で「開催都県は大変な過重負担を強いられるのではないか。思い切った改善策を検討する時ではないか」とする提案がありました。

この過重負担問題については、開催都県にも責任があったと考えます。いわゆる競争意識から他都県に負けまいと、年々手間をかけ、金をかけた結果、上位団体の日本ユネスコ協会連盟までが「改善策を検討する時ではないか」と言わざるを得ない状況にあったのです。

ただ、どの都県がこの問題の解決に着手するか、勇気、蛮勇を必要としたのです。

群馬ユネスコはこの大会のための実行委員会を組織し、思い切ってこれに取り組みしました。従来二日間をかけて実施してきた研究会を一日で開催しました。研究会の一日開催は、今後定着していくものと思います。

ただ、過重負担軽減の見地から研究会を振り返ってみると、まだまだ他に検討の余地があります。今後、後続各都県が更なる修正、改善に取り組まれるよう大きく期待したいと思います。

関ブロック群馬大会の開催が近づいた時、群馬が田舎の県であり、関ブロック大会の開催には施設の面で厳しいものがあると感じました。結局、前回開催地だった高崎市に再度お願いすることになってしまいました。

関東ブロック大会を全体会と分科

会で構成する限り、都会的な東京、千葉、埼玉などのように全体会会場と、そのすぐ周辺に分科会会場が確保できる必要があるのです。公民館などの公共施設を利用したらよいのではないかなどの提案もあるが、関東ブロック大会開催を念頭に検討すると適した公共施設は皆無と言つてよい。

この際、日本ユネスコ協会連盟からの「思い切った検討を」という投げかけを契機に、群馬は群馬方式なるものを徹底追及するチャンスだと思えます。

今回の群馬大会では、本県ユネスコから四つの提案、発表がありました。地域の実態をふまえた具体的、実践的な問題提起で、参加者の評価はすこぶる高いものでありました。

日本一外国籍市民の多い大泉ユネスコの問題提起は国際理解・交流。世界遺産登録となった富岡ユネスコの初初しい提起、日本のユネスコが力を入れてユネスコスクールの誕生を支援する藤岡、安中、前橋ユネスコの合同チーム。会員の高齢化に悩むユネスコに若い力を活用する太田ユネスコ等躍動する問題提起で分科会を盛りあげました。

今回、提案・発表にかかわらなかつた各ユネスコについても、地域の実情に添ったユネスコ活動を生み出していたら素晴らしいと思えます。関東ブロック大会を群馬で開催した真のメリットはそこにあつたと信じております